

第 8 節 古墳時代中・後期における製塩土器の搬入様相―丸亀平野を中心に―

1. はじめに

本節では、古墳時代の製塩土器について若干の検討を加える。製塩土器の編年及び時期呼称は、大久保氏の編年案（大久保 1992.1994.2001.2007b）を使用し、古墳前期の備讃Ⅳ式、古墳中期から後期中葉の備讃Ⅴ式、古墳後期後葉から飛鳥前半の備讃Ⅵ式に区分して、本遺跡における製塩土器の搬入状況を整理し、集落の性格を推定する材料としたい。

2. 古墳前期（備讃Ⅳ式）の様相

弥生後期後葉～終末期の備讃Ⅲ式には、高松平野北東部の土器製塩の衰退と同時に讃岐中・西部地方の臨海部で土器製塩が行われる（大久保 2002）。続く古墳時代前期前半の備讃Ⅳ式古段階においてもその様相は継続する。下川津遺跡は備讃Ⅲ式、同Ⅳ式古段階の生産地であり、内陸部の集落内で土器製塩を行っている（香川県教委 1990）。他に丸亀平野北西部及び荘内半島では、備讃Ⅳ式古段階から生産が開始されており、弘田川河口部の中東遺跡（香川県教委ほか 2008）、荘内半島の船越八幡遺跡（近藤 1976. 香川県 1987. 大久保 2001）が知られる。旧練兵場遺跡（図 999 上段）や稲木遺跡（香川県教委ほか 1989）、三条番ノ原遺跡（香川県教委 1992）など平野内陸部の集落において備讃Ⅳ式古段階の製塩土器の出土が確認できるが、極めて少量であり、製塩土器を使用した流通は明確ではない。

備讃Ⅳ式新段階には、島嶼部を含めて備讃地域で土器製塩の急激な衰退が認められる（大久保 2000）。海岸部の生産地は、船越八幡遺跡において備讃Ⅳ式古段階から引き続いて土器製塩を行っているが、海岸部に迫る丘陵上に立地する西久保谷遺跡においても混入品の状態で少量の備讃Ⅳ式新段階の製塩土器が出土しており、立地から見て、近隣の海浜部に生産地が展開する可能性が高い（香川県教委ほか 2005）。

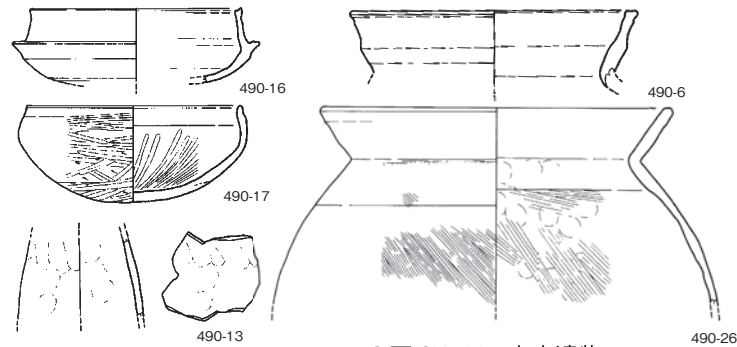
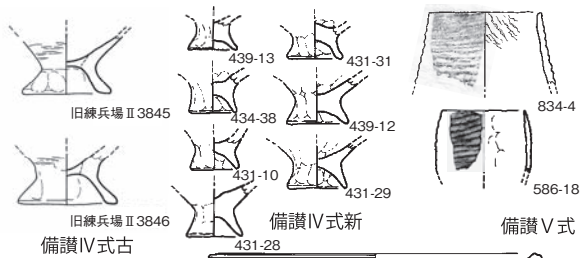
旧練兵場遺跡では、後世遺構の混入した状態で一定量の備讃Ⅳ式新段階の製塩土器が確認されている（図 999 上段）。脚台部の集計では、備讃Ⅳ式古段階を大きく上回る 45 点の出土が確認できるが、散発的な出土状況から生産地とは捉えられない。備讃Ⅳ式新段階の資料は、弘田川河口部の白方地域や、やや離れた西久保谷遺跡の近隣に未確認の生産地が存在する可能性があり、そこからの搬入資料と考えられる。しかし、備讃Ⅳ式新段階の古墳前期後半から中期前半は、弥生時代中期後半以降継続した大規模な集落形成が著しく縮小する時期に相当するため、製塩土器の搬入について議論できる材料に乏しい。備讃Ⅳ式の帰属年代を含めて、今後とも検討する必要がある。

3. 古墳中期末葉から後期中葉（備讃Ⅴ式）の様相

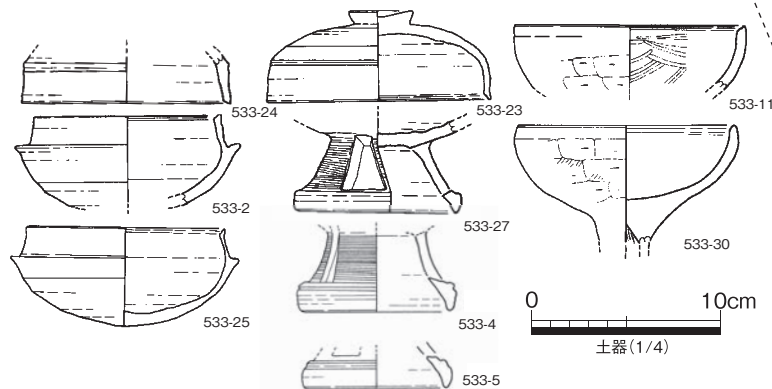
備讃Ⅴ式は、備讃地域でも土器製塩が低調な段階であることが既に指摘されている（大久保 1992.2001.2007a.b）。讃岐側においても三豊平野の小天王塚南の一例を除いて、出土数が極めて少ない状況であったが、本書報告分における発掘調査で一定量の出土が確認された（図 999 上・中段）。製塩土器は、小形の薄手コップ形を呈する備讃Ⅴ式の中でも類中野型とされるものであり、吉備地域で散見される平底の沖須賀型は確認できない。（大久保 2001.2007b）。時期決定に耐えうる出土状況を示す資料に乏しいが、TK23 型式併行期には確実に存在しており、時期的に若干遡及する可能性を残す（図 999 中段）。旧練兵場遺跡の集落動向とも関係するが、備讃Ⅳ式新段階とは一定の空白期を経て出現する可

備讃Ⅳ式古		2
備讃Ⅳ式新		45
備讃Ⅴ式	(中野型)	32
紀淡海峡 小椀形	(小島東型)	2
備讃Ⅵ式	(塩飽型)	23
	(玉島・笠岡型)	2
	(牛窓型)	1
備讃Ⅶ式		6

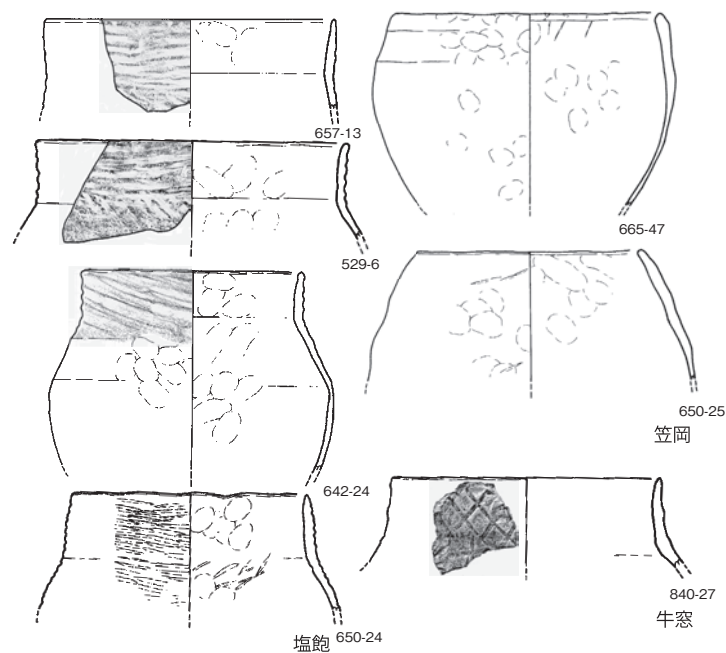
旧練兵場遺跡出土製塩土器集計表 (古墳時代)



小島東型と供伴資料 (TK208 型式併行期)



Z区 SH7005 出土遺物
備讃Ⅴ式と供伴資料 (TK47 型式併行期)



G区 SD0005 他出土備讃Ⅵ式製塩土器と土師器甕

図 999 旧練兵場遺跡出土製塩土器の概要と関連資料

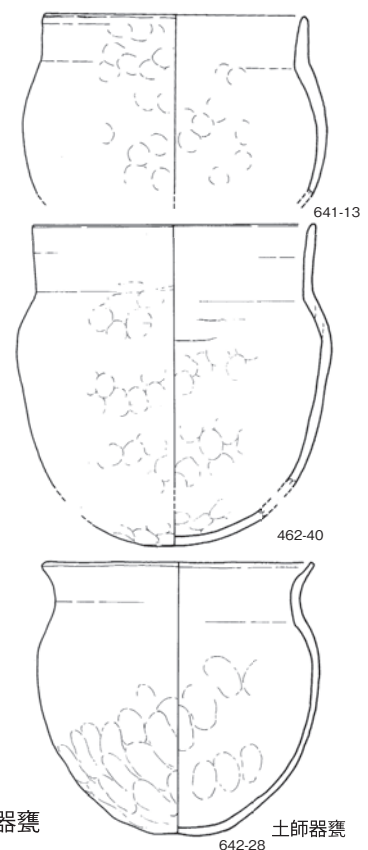
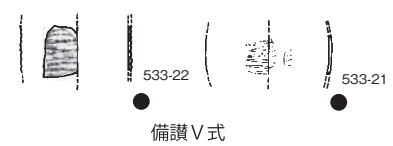
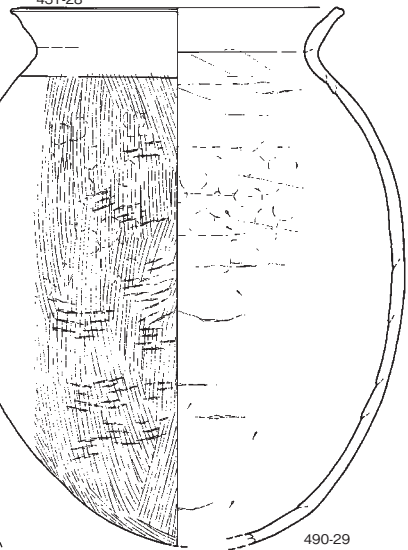


表 40 製造土器集成

番号	遺跡名	地域	時期	種別	備 讃 Ⅳ 式 古	備 讃 Ⅳ 式 新	備讃Ⅵ式				集 成 図 番 号	備考	文献
							埴 飽	笠岡	直島	牛窓			
1	船越八幡	庄内半島	前期・後期	生産	○	○	○				1		5,6,8
2	西久保谷	西部海岸	前期	生産?		○					1		9
3	一ノ谷	三豊平野	前期	消費	○						-		1
4	延命	三豊平野	前期	消費	○						-		3
5	小天王塚南	三豊平野	中期末～後期前半?	消費							-	遺跡性格不明	7
6	大門	三豊平野	後期～飛鳥	消費			○				3		2
7	中東	丸亀平野	前期	生産	○	?					1		10
8	稲木	丸亀平野	前期・飛鳥	消費	○		○				2		4,22
9	道下	丸亀平野	前期	消費	○						-		16
10	三条番ノ原	丸亀平野	前期	消費	○						-		15
11	下川津	丸亀平野	前期・後期・飛鳥	生産(前期)・消費	○		○				1,2	前期は生産遺跡	11
12	川津中塚	丸亀平野	後期	消費			○				2		12
13	川津一ノ又	丸亀平野	飛鳥	消費			○				2		13,14
14	旧練兵場	丸亀平野	前期・中期・後期	消費	○	○	○			○	図1,1		-
15	旧練兵場(仲村庵寺)	丸亀平野	飛鳥	消費			○				3		23
16	俊正	丸亀平野	後期	消費			○				3		19
17	吉野下秀石	丸亀平野	後期～飛鳥	消費			○				3		18
18	横立山東麓1号墳	一ノ又	後期	消費(墳墓)						?	3		24
19	中間西井坪	高松平野	前期・飛鳥?	消費	○				○		3	備讃Ⅵ式時期不明確	17
20	庵部南谷	東讃	前期	消費?	○						-		21
21	森広	東讃	前期	消費	○						-		20

※ 集成表は、消費地を抽出して作成したが、本文と関係する丸亀平野以西の生産地もしくはその可能性が高い遺跡についても含めて作成している。

- 香川県教育委員会ほか 1990 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 一の谷遺跡群』
- 香川県教育委員会ほか 1987 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 大門遺跡・矢ノ岡遺跡・利生寺古墳・北条遺跡・道免遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1990 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 延命遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1989 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』
- 近藤義郎 1976 「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』第22巻第3号考古学研究会
- 大久保徹也 2001 「埴飽諸島海浜部遺跡踏査の成果」『徳島文理大学文学部共同研究 埴飽諸島』徳島文理大学文化財学科
- 大久保徹也 2000 「製造土器の型式学的研究に基づく古墳時代中後期、中部瀬戸内産塩流通システムの復元ー平成11～12年度科学研究費補助金〈基礎研究C(2)〉研究成果報告書ー」
- 香川県 1987 『香川県史第13巻資料編考古』
- 香川県教育委員会ほか 2005 『県道高松志度線および県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 花池尻北遺跡・西久保谷遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 2008 『県道丸亀多度津線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中東遺跡Ⅱ・奥白方中落遺跡・奥白方南原遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 下川津遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1994 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 川津中塚遺跡』
- 香川県教育委員会 1998 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』
- 香川県教育委員会ほか 1997 『中小河川大東川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』
- 香川県教育委員会 1992 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊 三条番ノ原遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1992 『県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』
- 香川県教育委員会ほか 1999 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡Ⅱ』
- 香川県教育委員会ほか 2007 『一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 吉野下秀石遺跡』
- 香川県教育委員会 1997 『大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報ー県営団場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
- 志度町教育委員会 1990 『鴨部南谷遺跡発掘調査概報ー県営団場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要ー』
- 稲木遺跡発掘調査団 1989 『稲木遺跡ー県道奥白方善通寺線踏切除去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
- 善通寺市教育委員会 1989 『仲村庵寺ー旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書ー』
- 高松市教育委員会 1991 『高松市埋蔵文化財発掘調査報告書』

能性が高い。対岸の吉備地域の集落からの一定量の出土が見られるため、現時点では備讃瀬戸産の製塩土器と考えられるが、島嶼部生産地が明らかでないため、断定はできない（大久保 2007b）。

以上のように、現状では備讃Ⅴ式はほぼ旧練兵場遺跡でのみ確認できる。また、旧練兵場遺跡の状況は、散発的な出土状況や立地から見て消費地として捉えられよう。吉備山間部での備讃Ⅴ式の出土事例と比較して、讃岐側での製塩土器を使用した塩流通は未だ低調な段階と見られ、その背景には備讃全体で低調と考えられる生産規模や、想定される生産地が対岸の吉備側寄に存在していることを暗示しているかもしれない。

当該期には紀淡海峡地方の小島東型とされる硬質な焼成の小椀形の製塩土器が少数確認できる（図 999 中段 大久保 2001.2007b）。2 点という量的に限定される出土量から見て、搬入品の可能性が高いと考えられるが、詳細は今後の検討を要する。共伴資料から見て、古墳中期の TK208 型式併行期に位置付けられる可能性が高く、備讃Ⅴ式の類中野型に時期的に先行すると見られる。百間川原尾島遺跡など吉備地域で散見される紀伊北部と見られる西庄型の製塩土器が見られるのと同様に、備讃地域での土器製塩再開期に他地域の製塩土器が搬入される状況を示す可能性があり、技術移転や土器製塩集団の移動を含めて注意される（大久保 2007a.b）。

4. 古墳時代後期後葉から飛鳥時代前半（備讃Ⅵ式）の様相

備讃Ⅵ式は備讃島嶼部において生産規模が著しく拡大する時期に相当し、製塩土器の法量が大形化を遂げる（大久保 1992）。先行する小椀形の備讃Ⅴ式との距離が大きく、急激な型式変化が生じている。この備讃Ⅵ式の製塩土器の型式変化を探る材料として、当該期の小形土師器甕がある。本地域の 6 世紀後半に組成する小形の土師器粗製甕（図 1 下段右側）は、7 世紀以降のそれと比較してハケ目調整を多用せず、胴部に指オサエを明瞭に留める。備讃Ⅵ式との差異は、口縁部のヨコナデの有無と口縁部外面のタタキ目の存在が挙げられるが、法量や直立気味の口縁部形態など共通する要素も多い（大久保 2007b）。備讃Ⅵ式の製塩土器には、塩飽群島・直島群島など生産エリア別の型式学的特徴を示すことから、製塩土器そのものは各エリア内で生産・消費されたと考えられる（大久保 1992.2001.2007a）。したがって、土師器甕との類似性は、大形化を指向する備讃Ⅵ式の成立時に、法量的な点を中心に小形土師器粗製甕を参照された可能性を示す。

当該期には消費地である集落からの製塩土器の出土例が急速に増加する（大久保 1992.2001）。しかし、製塩土器が出土する集落の分布は、丸亀平野を中心とした讃岐西部に偏った傾向を見せる。

丸亀平野における備讃Ⅵ式製塩土器が出土している集落は、臨海部に立地する下川津遺跡から平野奥側の内陸部における俊正遺跡や吉野下秀石遺跡などの一般的な集落でも見られ、当該期の通有の現象となる。集落を構成する竪穴住居の約半数乃至これをやや上回る頻度出土する事例が多く、各竪穴住居に廃棄される製塩土器は数個体程度でまとまって出土することはない。また、生産関連遺構内の積極的な共伴や祭祀に関連した出土状態を示す事例は見られず、竪穴住居単位で消費される食用塩としての性格が読み取れる（大久保 2001）。

前述のとおり、備讃Ⅵ式は各生産エリア毎に特徴的な製塩土器を使用することが明らかになっているので、それを利用して搬入された製塩土器から見える生産エリアを検討してみよう。

本遺跡出土資料を含めて、丸亀平野で出土している備讃Ⅵ式の製塩土器の大半は、塩飽群島産と見られるものから構成されている（表 2）。本遺跡では、牛窓産の可能性のある格子のタタキ目をもつ製塩

土器や、笠岡産のタタキを欠落させ厚手でボール形を呈する製塩土器が極めて少数確認できるが、圧倒的に塩飽群島産の製塩土器が多い状況にある（図 999 上段表）。また、丸亀平野西側に隣接する三豊平野北部の大門遺跡の製塩土器も塩飽群島産と推定でき、本時期に讃岐西部の消費地で確認される製塩土器の大部分は塩飽群島産と見られる。

この状況は、津寺遺跡など吉備の一部の集落や、近畿地方で見られる複数の生産地からなる製塩土器の組成とは明確に区別されるもので、備後から備中北部と同様に特定の生産エリアの製塩土器が排他的に広がる状況を示している（大久保 2001）。

5. まとめ

上記の丸亀平野の集落の中でも、違った色彩を放つのが丸亀平野北東部の大東川河口部に存在する下川津遺跡である（香川県教委ほか 1990）。下川津遺跡は、6 世紀後半に突如として再出現する計画集落的（広瀬 1986）な性格に加えて、土師器・木器類などの生産及び須恵器などの貢納物の一時的な集散地として捉えられている。また、同時に蛸壺の生産も行っており、海浜部や島嶼部の漁労集団とも一定の交易基盤をもっている。下川津遺跡のような交易の中継点となる集落を経て、塩飽群島産の丸亀平野の各消費地に流通したと考えられる。

製塩土器での流通が明確化するとはいえ、その出土量は社会全体の塩需要量を満たすものではなく、流通全体における極めて部分的な状況を示すと考えられる（岩本 1980, 大久保 2001）。非効率のともいえる製塩土器に再梱包して流通させる状態が、流通過程における計量や消費段階の貯蔵容器転用など末端段階を意識したものであるなら、生産エリア側が消費地側の要求を強く意識したオンデマンドな流通と表現できる。しかし、この状況が丸亀平野及びその周辺に集中し、製塩土器が示す生産エリアが平野の眼前に広がる塩飽群島産であることや下川津遺跡のような流通を仲介する集落の存在を考慮すると、生産エリア側と消費地側との間のアクセスの濃淡が引き起こした現象と考えられる。また、塩飽群島をはじめとした備讃地域における集中生産の開始を前提として、製塩土器を使用したオンデマンドな状態での食用塩の流通を可能としたとも考えられる。

こうした丸亀平野の備讃Ⅵ式期におけるきめ細かな流通は、あくまでも生産地周辺に展開した食用塩のローカルな現象であって、備讃で大量生産された塩の大半は、備蓄・大量消費用に生産を委託した側（ここでは近畿地方）に一括して再梱包され流通したと考えられる。

こうした中での旧練兵場遺跡の製塩土器の搬入状況は、流通における集散地を介した生産地との結び付きのみならず、末端消費地における製塩土器の用途等を示すものとして理解できる。

《引用・参考文献》

- 岩本正三 1980「製塩土器の分布と流通」『考古学研究』27-2 考古学研究会
岩本正三 1994「香川県」『日本土器製塩研究』（近藤義郎編） 青木書店
大久保徹也 1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究（下）』（近藤義郎編） 山陽新聞社
大久保徹也 1994「岡山県」『日本土器製塩研究』（近藤義郎編） 青木書店
大久保徹也 2001「製塩土器の型式学的研究に基づく古墳時代中後期、中部瀬戸内産塩流通システムの復元－平成 11～12 年度科学研究費補助金＜基盤研究 C（2）＞研究成果報告書－」
大久保徹也 2007a「第三章 古墳時代の土器製塩」『備讃瀬戸の土器製塩』吉備人出版
大久保徹也 2007b「塩生産・流通の古墳時代後期的特質について－とくに備讃瀬戸海域の生産再開と畿内における塩調達方式－」第 56 回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から 20 年－ 埋蔵文化財研究会
近藤義郎 1958「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』223
近藤義郎 1966「製塩」『日本の考古学』V 河出書房

近藤義郎 1976「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』第 22 巻第 3 号考古学研究会
近藤義郎 1978『日本塩業大系 史料編 考古』日本専売公社
近藤義郎 1984『土器製塩の研究』青木書店
近藤義郎・岩本正三「塩生産と流通」『岩波講座 日本考古学 3 生産と流通』岩波書店
広瀬和雄 1986「中世の胎動」『岩波講座日本考古学 6 - 変化と画期 -』岩波書店
香川県 1987『香川県史第 13 巻資料編考古』
香川県教育委員会ほか 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊 稲木遺跡』
香川県教育委員会ほか 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 7 冊 下川津遺跡』
香川県教育委員会 1992『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 11 冊 三条番ノ原遺跡』
香川県教育委員会ほか 2005『県道高松志度線および県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 花池尻北遺跡・西久保谷遺跡』
香川県教育委員会ほか 2007『一般国道 32 号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 吉野下秀石遺跡』
香川県教育委員会ほか 2008『県道丸亀多度津線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中東遺跡Ⅱ・奥白方中落遺跡・奥白方南原遺跡』
香川県教育委員会ほか 2008『一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 俊正遺跡』